
その手を離さない。

美波可奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その手を離さない。

【Nコード】

N7725W

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

過去の俺に会ったら言いたい言葉があつて。
俺はあいつに感謝してるって。

序章

タイムマシーンで過去に帰って。
あの頃の俺にもし。

もし語ることができたならば。
俺はきつと。

一番に言うことは俺と同じ鐵を踏むな。
だと思っ。

チャライ俺は結構なんでも出来ると思っ。
そして何だっで自分の思い通りにになるんだからと傲慢にもそう思
う。

まあ別に一番になる必要もなかつたし。
それに二番でも人気さえあれば別に落ちぶれることもないと思っ。

そんな俺が行った過去の話。
バカみただけど本当の話。
俗に言うパラレルってやつ？

平衡世界の話。

そして俺みたいなのに手を焼いて。
手を焼いた拳句身の危険まで与えてしまったあいつの話。

あいつはこの世界には居ないんだ。
俺のせいだ。

「透さん。スタンバイよろしくお願いします。」

それは良くあいつが言ってたことだった。

過去へ。 1

俺はその時まで普通だった。

ってかまさか自分にそんなのが降りかかるだなんて思ってもいなかったし。

覚悟を持てと言われても到底無理な話で。

俺がそれに気づいたときには遅かった。

普通にカメラの前に立ち。

普通に演技をし始めた時のことだった。

スポ根の以前からありそうな青春映画。

その俺は準主役。

だからセリフも多ければ主人公との絡みも多い。

んでありがちだけど見かけはやばくて。

考えは大人で。

主人公とはスポーツを通して判り合えるなんて奇跡みたいな映画。

その俺の子分みたいな奴の話。

ってか俺が勝手に好きになった奴の話。

それは海でのロケで。

俺は普通に泳ぎもうまかった部類だから。
まさかさ。

まさか自分が溺れるだなんて思わなかった。

死ぬ瞬間。

暗転する前に。

何だかやり残したことがある気がした俺は。
足掻いたね。

こんなところで死ぬのは嫌だつて。

その時にどうも俺は時空の狭間とやらの挟まっただけらしい。

それしか今は言えないんだけど。

過去へ。

2

時空の狭間っていうのは結構広いんだって。

稀に俺みたいに死ぬはずだった人間が挟まって。

過去とか未来とかの平行ワールドに行ってしまうらしい。

で。お約束。

その世界での俺には絶対会ってはいけないってこと。

もうその時点でせっかく助かった命はアウトだってさ。

何かで読んだことがある。

俺の場合は過去へ飛んだらしい。

らしいというのは確かじゃないから。

だってあるはずだった建物がなかったり。

潰れるはずだったデパートが実はナンバーワン売上だったり。

学校がアミューズメントパークになってたり。

川沿いの土手はでっかいこの国一の高さのテレビ塔が立ってたり。

売れっ子だったはずの歌手がまだ下積み時代だったり。

…俺の自宅は豪邸だったよ。

目も覚めるような。

噴水とかプールとかさ。

自宅にあって。

お手伝いさんだっている。

俺はそのボンボンだった。
まだ。

まだ親が事業の失敗をする前の家だった。

おかしいなあとか。
そんなふうに思っただけ。
だけどいいやって思っただ。

それは俺の思考がまだこの時は。
その場限り楽しめば多分良かったんだ。

自宅の前に行った時。
声をかけられるまでは。

過去へ。 3

「…あの。」
背の低い人だった。

「…あの。ここの家の人ですか？」
俺はいささかムツとして。
「そうだけど？」

険のある言い方をした。

「…あの。向坂透さん？」
そいつは俺の名前を一発で当てた。

「…そうだけど？」
あんた一体何なわけ？」
俺がそう言つと。
何かそいつは胸をなでおろして。

「良かった。間に合った。」
そうつぶやいたんだ。

「…何に間に合ったんだよ？」
俺が問うと。

「…黙って僕についてきて。」
そいつは黒い革の手袋をしてて。
俺の手を掴んだ。

「！！！！一体お前何なんだよ？」

俺は掴まれた手を振り払って。

怒鳴ったんだ。

そして気づく。

このクソ暑い真夏の。

体感温度はきつと40度超えてるだろう季節に。

この不似合いな黒い手袋は何なんだろうつて。

「あなたの命にかかわることなんだ！！」

そいつは俺に怯みもせず。

構わずまた手を掴んで。

凄い勢いで駆け出した。

俺の頭はついていかなかった。

走りながら。

つぶやく。

「あなたはここから売れっ子とまではいかないけど俳優になるんだ。
それであなたの両親は事業に失敗するけれどあなたが稼いでるか

ら少しはマシなんだ。

…そしてあなたは。」

小さい声だったくせに。

そこだけは妙に澄んだ声で。

「…あなたは幸せにならないといけないんだ。

人が少しぐらい不幸でも。

あなたは幸せじゃないと僕が救われないんだ。」

…意味が判らなかった。

俺は溺れて。

死んだと思ったら。

気づいたら何だか知ってるような知らないような街に来てて。

「…幸せってなんだよ？

人を不幸の塊みたいに！！」

俺がそう言つと。

そいつは言っただ。

「あのねえ。この世界にあなたは2人も要らないの。
その意味わかってる？」

「…あ？」

「だから！！貴方は今現在この街に2人居るんだよ。
そしてうまいこと行けなかったほうが消える運命なの！！」
「は？」

「…あなたがこの世界の自分と会ったらその時点でアウトなの！！
僕が来たのはあなたが自分の世界に戻るようになるの！！」

…どうして。
疑問は消えなかった。

だけど聞けば聞くほどに判らなかったんだ。
この目の前にいる。
小さいこいつに。

何をどう聞けばいいかも判らなかったんだ。

AKI 1

「遅れたけど僕は 秋霞^{あきかすみ}って言います。
あなたよりだいぶん年上です。」

そいつはそう言っ
て。俺に自己紹介をしたんだ。

名前だけでもなんかわかるような気がして。

「秋って呼べばいいの？」

それとも下の名前？」

俺はタメ口だった。

だってこんなわけ判らない中に放り出されて。

拳句自分がこの世界にはもうひとりいるだって？

頭がおかしくなりそうだった。

「どちらでも？」

そう言っ
て秋は立ち止まり。

振り向いて言っ
た。

「ここまで来ればどうにかなるかな。」

「どうにかっ
て？」

「僕はこの世界に飛ばされたあなたを追いかけてあなたとは違っ
た。」

未来から来たんだ。

過去のあなたがこれからどこに行くとか誰と会うとかそんなのは全部知ってる。」

「…俺は当人だけど覚えてないんだけど？」

「…今からあなたは街に行つて。
スカウトされるんですよ。」

「…え？」

「…それであなはそこそこ売れる俳優になる。

僕の計算ではあなたは溺れてこの世界に飛ばされたんでしょ？」
全部合つてて。

秋が言うことは全部合つてて。
怖いぐらいで。

俺が頷くと。

「…幸せな頭でもそんなあなたにもファンがついて。

あなたの家が事業に失敗しても別に食べるには困らないぐらいで。
…だから僕はあなたに言いたかったんだ。

人が少しぐらい不幸でもあなたは幸せにならないといけないって。

「

「秋。お前何が言いたいわけ？」

俺がイラついて問うと。

「…好き勝手に生きてるあなたの人生に僕は左右されてるんだ。

言いたいこと言わないと割に合わないでしょ？」

「なんだよ！！！！」

俺が大声を出す。

秋は例の手袋をしたままの手を出して。
静かにと睨んだ。

俺が文句を言ってやろうと。

そんなの構うもんかと思った時。

人の声がしたんだ。

AKI 2

「秋。お前これからどうすんの？」
聞き違いだと思った。

だって秋と呼ばれて振り向いたその人は。
目の前の秋霞と名乗ったその人とは全く似てなくて。
ってか似てたとしても判らないぐらいのすごい化粧をしてたから。

トレードマークのような革の手袋だってしてなかったし。

「…今から俺はレコーディングだよ。
新曲出んの。」

今度こそ俺はお前になんか負けないからな。」
口調すら違って。

俺は耳を疑った。
ってかなんで？

「…あれがこの世界の僕です。」
秋が言った。

「…バカみたいに粹がって。
あの頃の僕はそんなのしかなかったんだ。」
「え？」

「僕が来た未来とあなたが来た未来とは多分違うんだと思う。
微妙にこの世界だって違うでしょ？」

僕が来た未来は…悲惨だったよ。」

その横顔に俺は何かを言える雰囲気はしなかった。

「僕が。人間が好き勝手に生きた結果が僕がいた未来なら。

僕はそれでも仕方ないと思うんだけど。

でも パラレルワールド 平衡世界があると知った今は。

やっぱりここで食い止めなくちゃいけないんじゃないかとか。
そう思ったりして。」

「お前はどうかやってきたの？」

「僕は。

僕がいた世界にはタイムマシンがあるんだよ。

どこぞの漫画みたいに。

だけど帰る方法は判らないんだ。」

…意味が判らなかった。

「秋。」

「向坂さんがさ。

もし。このまま俳優の道を選ばなかったら。

もしかしたら変えられるかもしれないんだ。

未来が。」

「はあ？」

「あなたの決断が分かれ道なんだ。

やるかやらないか。

売れるか売れないか。

堅実な道を選ぶか博打を打つか。」

「でも何で俺？」

「…そんなの僕が一番聞きたいよ。」

「だけど。あなたの道が分かれ目なんだから仕方がないでしょう？」

秋はそう言つて。

僕を真正面から見据えた。

選ぶ未来選べない未来 1

たった一人の。

弱くてわがままな人間が生きる道が。

世界を変えることだってあるって。

俺は昔好きだった歴史で学んだはずだった。

例えば坂本龍馬が死ななければ。

この国はもっと良くなってたかも知れないし。

もしかしたら。

西郷隆盛が自害しなければ。

今のこの国はもしかしたら他国になんか負けないほどに強力で強靱な力をもってたかもしれない。

「…俺が俳優にならなければどうなの？」

「…あなたは。」

「今から発明をするんだ。」

「え？」

「…人が悲しまない世界を作るための発明。偉大な発明。」

「…それは何？」

「何かの仕組みとか？」

「まさか政治家先生になれとか？」

「…向坂さんは。随分と頭が晴れですね。」

「…何だよ。」

「…そんな現実味を帯びないことじゃない。」

「…だったら。」

「…今からね。ちょうど半年後に。
大地震と大津波が来るんだよ。」

「え？」

「…つてかくるつて予感がするつていうか。」

「…はあ？」

「…だけどね。これだけは確実。」

「…あなたに掛かってるつてこと。」

「…俺がいたところにはそんなのはなかったし。」

「…だって今は一体何年なんだよ？」

「…俺は2011年に生きていて。」

「…今は1999年ですよ。」

「…まだあなたは学生じゃないですか？」

「…頭がおかしくなりそうだった。」

「…それに目の前にいる秋は随分と地味な奴なのに。」

「…さっき見たこの世界の秋は随分と派手な奴だったから。」

「…で。俺は何したらいいつて？」

「…僕が言うことに頷いて。」

「…僕が言うとおりに動いてくれればあとは僕が何とかするんで。
向坂さんは僕が言うとおりにしてくれれば。」

「お前って頭いいの？」

「え？」

「だって発明するんだろ？」

「発明っていうか。」

「そんなたいしたもんじゃないんだ。」

「ただ地震が来るからそれであな自身とこの世界のあなたと助ければそれで。」

例えば。

もし。

「自分が死ぬってわかってて。」

「足掻かない人間なんかいるだろうか？」

「それをすぐに受け入れられる神さまみたいな人間がいるだろうか？」

なんて。

「そんなことをいくら頭が春の俺でも思ってたんだ。」

選ぶ未来選べない未来 2 } side AKI }

…あなたを初めて見たときはそれはそれは腹が立って。
その次は妙に悲しくなつて。

この世界の僕はミュージシャンらしい。
ことが判つて。

あなたを見つけたのはあなたの大きい実家の前だった。

僕は一目見てあなたに希望は持てないと思つた。
だつて適当でチャラチャラしてて。

人を馬鹿にしてる眼差しと。

自分がいかに優れてるかを誇示するような人間には。

この先の未来はきつと。
行き着くのは僕がいた未来だろうなあとか。
そんなことをうつすら思つて。

でも信じられないけど。
歪んだ未来を治す方法は。
この目の前にいるあなたが。

誰も悲しまない世界を作ろうと発明する装置なんだ。
代償は僕の命。

それは決まってるの。

そう聞いてきたから。未来で。

僕には身内もないし。

僕には帰るところもないし。

それに僕が死んだって悲しむ人間もないし。

ただあの未来にこの過去が繋がってるとしたらそれは悲劇以外の何ものでもないから。

だから。だからさ。

あの大地震の後。

みんなほとんどの人は生きる意欲も働く意思も全部無くしてしまつて。

一文無しが溢れてさ。

仮設住宅も今度は台風の洪水に巻き込まれて避難所に逆戻りの生活でさ。

僕は幸い何も無くさないですんだけど。

ただどさ心にぽっかり穴が空いたようだったんだ。

何もできない自分が妙に腹立たしくて。

どうして生きてるんだろうとかそればかりで。

でもね唯一。

ボランティアで行った街で。

生きてる人がいるのにガレキのせいで助けられなかった。

その時の裂傷がひどくて。

僕の両手は見せられないほどだった。

悲しむ人間はいないと僕は言っただけ。

正確には勘当されたってやつ。

僕も一応両親が揃った普通の家庭に育ったんだけど。

僕がイかれたアマチュアバンドで夢を見たから。

大学は中退しちゃったし。

親を悲しませる結果になってしまったことを本当に後悔してるんだ。
後悔って後から悔やむって書くでしょ？

本当にそうだなあって思うんだ。

売れると思ったのは間違いだった。
甘かった。考えが。

この過去の僕は。
虚勢を張って。

強がっているけどいつも何かに苛まれてることを僕は知ってる。
何しろ本人だからね？

半年後の僕の末路があのザマなら。
きっと生きてはいけないと思う。

だから新しい未来を創るために。
僕は向坂透とは違う未来からやって来たんだ。

向坂透が造るはずだった装置で。
意味判らないでしょ？

でも現実なんだから仕方がない。

…向坂透。

未来のタイムマシンの創始者は。
この過去ではまだ生きてる。

まだ生きてるから。

まだ取り返しがつくんだ。

少しぐらい未来がゆがんでも僕はあなたに生きてて欲しい。

そしてみんなが幸せになれるための装置を作って欲しい。

…その代償がいるのなら。

僕は喜んで死ぬつもりなんだから。

今のあなたはまだ知らないけどね。

だって思った以上にバカそうなんだもん。

前途多難ってこんなことを言うんだなあって思ったりして。
(笑)

AKIとの接点 1

「…っ！！お前の言うことわけわかんねえんだよ！！（怒）
俺はキレた。
って頭に來た。

秋のやつ偉そうに俺に指図するんだ。

俺がたかだかコンビニに行こうとするとやめるだの猛烈にうるさい
！！

それに秒単位で動いてやがるんだ！！

「…あなたは！！なんで僕の言うことが。

しかもこんなに簡単なことなのに聞けないんですか！！」

「じゃあ聞くけどなんで俺がコンビニに行ったらダメなわけ？」

俺は無然と聞いてやった。

だって頭に來た。

「あなたは！！

自分と鉢合わせになって死にたいんですか！！」

大声だった。

それを聞いて俺はハッとしたんだ。

死にたいのかと聞かれて。

そう言われると死んだっていいほどに別にコンビニに行きたいわけ
でもなく。

「…でも会わないって保証もあるにはあるんじゃないの？」

ちよつとバツが悪くて小声で聞いてみた。

「…だったらこの世界と同じ思考のあなたがこの時間にどここのコンビニに行ったとか。

正確に覚えてるんですか？

あなたはフラフラとどこでも入る節操なしじゃなかったでしたっけ？」

「…節操なしっていくらなんでも言い過ぎじゃねえの？（凹）」

「だってあなたのことならきつとあなたより僕はよく知ってる。」
「…何で？」

「…僕とあなたの接点考えてみればいいんじゃないですか？
幸せなことに未来のあなたは僕との接点を持ってなかった。
それが救いで唯一なんだ。」

…意味は判らないし。
秋はム力つくし。

だけど正しいこととはなぜか思えたんだ。
なんでかわからないけど。

AKIとの接点 2 side A K I

排他的未来に生きてた僕は。

何とかその根源を探したくて歴史学者になろうと思った。

それは自分が無力だと悟った夏のことだった。

大地震と大津波でこの国の首都機能は全面的に麻痺して。
もうきつと滅びるだけだと思った。

極暑が異様に続く夏だった。

人間が無力だと感じるときは。
世界が終わる時だと誰かが言った。

僕もそう思うし。
確かにそう思ってた。

僕がボランティアで行った街に。
ガレキの隙間に埋めつくされた古びたマシンがあったんだ。

それは僕にしか見えなかった。
一緒に行ったハズの仲間には見えないらしく。
僕は随分と頭がおかしいと言われた。

それは古い文字で。

漢字ばかりで書いてあった。

時間移動装置。

日本語ではそう言うらしい。

そして何故か僕の名前が刻んであつて。

そして発明するであろう向坂透の名前があつて。

絶対に過去で向坂透を死なせてはいけない。

そう書いてあつた。

そしてその装置には赤いボタンがたった1個しかなく。

押したとたん僕は这个世界へ迷い込んだんだ。

まあ这个世界が過去だとは思わなかったけどね。

だって1999年らしいし？

たかだか10年前なだけで。

それに僕が助けなくちゃいけない向坂透は。

幸いなことにどうか。

何というか。

この未曾有の大惨事を知らないらしい。

ということとは。

この世界はきつと バラレルワールド 平衡世界で。

この世界では確実に半年後。

あの大惨事は起こるけど。

僕にはどこが安全だとか全部判ってるんだ。

僕はこの男を好きになれなかった。
だけど。

こいつがああのタイムマシンを作って。

どうにかあの大惨事を。

起こっても最小限に食い止めたいと思ってるのなら。

僕にしか見えなかったマシンの意味が何となく判るんだ。
ってか判りたくなかったけどね。

その時だった。

繁華街の巨大スクリーンにいきなり僕が映ったんだ。

AKIとの接点 3 side AKI

目を覆いたくなるようなザマだった。

未だ覚えてる。

この頃の僕は。

派手好きで短絡的で。

あの女みたいな衣装も。

化粧も淋しいのの表れだった。

「…あれ。お前じゃねえの？」

巨大スクリーンを見上げて。

向坂が言った。

僕は頷いて。

「…バカの成れの果てですよ。」

そう言ったんだ。

この頃の僕は。

それを見て悲しむ人がいたとしても。

別にどうも思わなくて。

「わくく。ちゅくくした。」

…このことも昨日のここのように覚えてる。

だって。

パフォーマンスなんだって言われて。

節操なしの僕は。

大して何も思わなくて。

ただ。

人気が出ればいいと思ってて。

「お前さあ。男とちゅくして嬉しいわけ？」

当然の反応を向坂はしたんだ。

唯一嫌そうに言ったのは予想外だったんだけど。

「過去の僕はきっとあなたよりずっとタチが悪くて。

節操なしであれでいいと思ってた。

多分本気で。」

僕にはそう言うしかなくて。

だけど。

「本気で売れるためなら何でもするって。

カラダ売ったってそれでいいと思ってた。」

汚れまくった僕は。

そしていつか気づくんだ。

あの大惨事が起きて。

救いにもなんにもならない歌を歌って。

必要なら男とでもキスをする。

…そんなの一過性の人気に過ぎないのに。

「…秋ってさ。

不思議な奴だよな。」

「え？」

向坂はそう言って僕を見た。

「…お前の論理でいけばここにいればお前のバカな様子がスクリーンに映るの判ってたんじゃないかねえの？」

それを敢えてなんで俺に見せる必要があるわけ？」

意表をついたその言葉に僕は涙がでたんだ。

痛いわけでもなく。

悲しいわけでもなかったのに。

AKIの涙 1

「おいおい。泣くことないだろう?」

まさか涙を見せるなんて思わなかった。

だって。こいつ命令口調だし。

偉そうだし。

だけど実際物事をよく知ってるのは事実だし。

でも心からの言葉は届くんだと。

そう秋は言っただ。

「僕が馬鹿なところ見せたらあなたは

きっと安心するんじゃないかと思って。」

秋はそう言った。

「え?」

「だから。」

涙を拭いながら秋は言った。

「きっと僕のあのザマを見てあなたは軽蔑するかもしれないって
思っただけだ。」

でも僕はわかっててあなたにアレを見せた。

「あなたに僕と同じ鐵を踏んで欲しくないんだ。」
映像と音楽はずっと鳴ってて。

まるで世紀末のような音楽で。
退廃的で。

心は荒んで。

どうしようもなく。

救いもきつとないんじゃないかとか。

「人を幸せにする装置って何なんだよ？」
俺は疑問を投げかけて。

映像から背を向けた。

つてか秋がそこに化粧をしているだけで胸糞悪いんだ。

これは嫉妬？

俺は頭を振って。

違うと敢えて打ち消した。

AKIの涙 2

「…幸せってあなたにとって何？」
哲学的なことを秋は聞いてきた。

俺が。

「…まあとりあえず何も心配がないこと？」
聞き返すと。

秋は。

「…そうだね。」
そうつぶやいた。

一体全体何なんだよ。
いい加減キレそうだった。

だって訳わかんない。
ここが過去だってことだけは判ったから。
でもこの俺が。

何の力も持っていない俺が。
何をしろって言うんだよ。

「…あなたは携帯持つてるでしょ？」
俺は秋にそう言われて。
ハッとした。

そういえば。

俺は海で溺れて。
確か海パン姿だったはずで。

それが。

ちゃんといつもの服を着てることに遅ればせながら気づいたんだ。

1999年のこの世界では俺の姿は少し奇異に映るみたいけど。
俺はポケットの中を攫った。

そしたらさ。

お気に入りのデコデコの俺の携帯が出てきたんだ。
まるでおもちゃみたいだと秋は言っただけ。

「…携帯は今はまだ高価だから持ってる人も少なくて。」
秋は俺から携帯を取って。
カメラ機能を見た。

「…やっぱり圏外だね。」
そう言っただけ息をついた。

「…携帯の通信機能からあなたの発明は生まれたんだ。」
秋はそう言っただけ触る。

そしたらどうも。
メールが残ってたらしくて。

女の子からのメールとか。
いわゆる誘いのメールとか。

何だか悪いことが見つかった時みたいの気持ちになって。
俺は携帯を秋から取り上げて。

「俺はそんなに頭よくないし。
俺がした發明なんか誰だって出来んじゃないの？」
そう言ったんだ。

「それに!!」
俺は続けた。

「それに俺がいたあの世界では俺がいなくて大騒ぎになってるとか
ないわけ？」
建物があつてみたり。
無かったものがあつてみたり。

居たはずの者がいなかったら。
普通は!!

「…そんなのあなたが一番よく知ってるんじゃないんですか？」
秋がそう言つて。
俺を見つめた。

「…俺の存在自体が抹殺されたってこと？」
俺がそう口に出したら。

秋が悲しそうな表情を一瞬見せて。
そして言つた。

「だからあなたは！！

あなたの世界に帰るために何としても発明をしないとイケないんだ！！

僕も手伝うから。」

秋のその姿を。

俺はどこか遠くの次元で起きてることのように見ていた。

この暑い 真下さなか黒い手袋を外さないこの男に。

賭けてみようと思った自分がいたことも。

そしてこいつに縋るしか方法がないってことも。

頭が悪い俺にも流石に判ったんだ。

AKIの涙 3

「…ここは？」

「…僕が絶対用のないところを考えたらここしかなくて。」

秋はそう言っで。

図書館の裏口を探った。

「何かサバイバルみたいじゃね？」

俺がそう軽口を叩くと。

秋はため息をついて。

でも結果何も言わなかった。

「…それってピッキングってやつじゃねえの？」

俺の無駄知識は雑学が多い。

それに裏口から入らなくても。

そう思っで。

「…ここはもうすぐ焼けるんです。火事で。」

驚くようなことを言っで。

「…火事っで？」

「…言っでしょ？」

僕もあなたとは違っ未来から来たっで。」

「だから！！ちゃんと説明しろっで！！」

「例えばあなた。」

僕の忠告聞く気になりますか？

頭を疑うんじゃないですか？

僕の気がおかしいんだって思わないですか？」

「でも！！」

「…火事の原因は判りません。

だけど何かが起きたのは確かで。

だけどここなら僕に会うこともあなたに会うこともないでしょ？」

秋が言うことは確かに尤もで。

尤もなんだけど何か。

何かが違う。

「…怪我した人とか居たんだっけ？」

「…何が言いたいんです？」

「だからもしかして火が出るまで待つてるとか？

例えば！！」

俺が言うと。

秋は眉根を寄せて俺を見上げた。

「…火が出るまで待つてますけどそれが何か？

僕たちには関係ない出来事だし僕たちが抵触できる過去じゃないでしょ？」

人が死んだってそこを変えるわけにはいかないし。」

「…人が死ぬのか？」

「ええ。僕たちじゃない誰か2人。

出火場所も僕は知ってるし。

誰がどう死ぬかもわかってる。どこが安全でどこがダメなのか。それも知ってるから僕たちに危険はないんです。」

「でも！！」

俺はやるせなくて。

「……いつからあなたは博愛主義者になったんです？

あなたらしくないでしょ？

適当がウリの向坂さんじゃなかったでしたっけ？」

秋は俺を助けようと未来からやって来て。

俺を見つけた。

それで。

今は1999年で。

半年後には大地震と大津波が来るって。

携帯は高価だから。

ああ。頭がついていかない。

だけどこれだけは確かだ。

火が出るとわかってるなら人を避難させないといけないんじゃない

かとか。

そんなふうに思っ

て。本当はどうでもいいはずなのに。

AKIの涙 4

揺れ動く心は。

俺を突き動かした。

ってか自分の中にこんな嵐があるなんて忘れてた。

そうだ。昔は俺は誰にでも恐れなくて自分の意見を言えて。

実行できて。

誰に何と思われようと正しいと思うことをしようと思ってた。
ってか思う。

だけど叶わないことが多すぎていつしか諦めの心と。

自嘲の笑みと。

何があっても揺るぎない強いワガママだけが上手くなった。

だけど平和な俺がいた世界では。

この図書館の火事だって俺の記憶では無かった。

だから被害状況とかわからなかった。

「あ。秋。」

「なんです？」

秋はうんざりした表情で俺を見上げた。

「…例えばさ。その亡くなる人の命に抵触できなくても。その人が逃げられるチャンスを与えるってのはやっぱりダメなのかな？」

「…どうして？」

秋は意外と冷静な声で俺に返した。

「…助かる助からないは神さまの領域だったとして。それに俺が何とか噛んでどうしたいとかじゃなくて… チャンスをあげられたらって思ったんだ。だってこのまま見てるだけじゃ…！」

俺の中の心の嵐は。

強かった。

揺さぶった。

そんな情熱何処かに忘れてきたと思ってたのに。

「…悲しすぎるなって思ったんだ。

俺は自分が例えば死ぬ運命だと決まってて。

それにチャンスが与えられたら。

必死に足掻きそうな気がして。」

「…あなたは…！」

秋が声を荒らげて。

言った。

「あなたは自分の身がどうなるかわからないってのに他人の心配し

てる場合ですか？

「ってか僕はあなたに失望しました。」

「え？」

「…あなたはこれから何をするんです？」

「人助けをしたいならあなたが知ってる過去を探して死ぬはずだった人間を助けてみたらいいんじゃないですか？」

あまりの剣幕に俺は言葉がなかった。

「そのかわり僕の役目はここで終わりです。」

「あなたが知らない過去を僕が教えるとしても？」

秋はマジだった。

マジで怒ったのだけはいくら鈍い俺でもわかったんだ。

AKIの涙 5

俺は秋という人間を全然鈍すぎて判ってなかったから。きつと秋の癪に触ったんだろう。

「火事だ！！！！！！」

サイレンが鳴って。

俺たちがいる裏口にまでそのサイレンは聞こえた。

それはよく学校でする避難訓練と同じ。

サイレンが鳴って構内放送が流れて。

でもそれは冗談じゃなく。

現実だった。

「助けないで！！」

その時だった。

俺が駆け出そうとした瞬間。

秋が悲痛な声をだしたんだ。

「助けて」じゃなく。

「助けないで」？

俺は自分の耳を疑って。

もう一度。

聞き返した。

「何て？」

「助けないでいいんだって!!」

あなたは全然わかってない!!」

ここであなたが何をしたって無駄なんだって何で判ってくれないんです?」

そう言われても。

「やってみないと無駄かどうかなんか判んねえんじゃねえの?」
俺はその時。

珍しくアツくなってた。

自分の中のこんな嵐。
無視できるわけがなかった。

「無駄なんだって!!」
大声だった。

秋が大声を上げた。

「……ここで死ぬのは。
僕の妹と母なんだ。」
「え?」

晴天の霹靂。

そんな言葉が頭の中に浮かんた。

「僕がイかれた格好でライブをやった頃。

…この図書館で火事になって。

僕は半勘当の身で。

家にほとんど帰らなかった。

…知らせを受けたとき何で図書館に母と妹がつて思った。

それは僕のライブ映像を父に隠れて見に行つたつて後で判つた時の僕の気持ちが判る？

あんなどうでもいい映像を見に行つて命を落とすだなんてどうかしてるつて。」

「でも大地震と大津波は？」

「…それはこれから半年後のこと。

僕はあなたが発明をするつて知ってる。

だけどこの世界の僕とあなたに鉢合わせをする場所は避けられないいけない。

そうなると文献も多いここしかないんだ。」

「でも助けたらいけないつてどうして？」

「…僕には会わず顔がないから。

あなたも僕の関係者に会つたらそこで!..!」

…判つたような気がしたんだ。

どこにいても。

何があつても。

俺たちには守らなくちゃいけない領域があつて。

それを超えろとこの世界は疎か多分もう滅亡なんだつてこと。

サイレンが鳴り止まない中。

俺は秋に言った。

「…話をしてよ。」

秋がどうやって今まで生きてきたか。」

秋は静かに。

静かに涙を流して。

黒い革の手袋の手を握り締めて。

立っていた。

立ち上がる 1

「僕の世界はこれから10年後の未来で。
大地震が起きてから。
首都機能は麻痺した。」

重い口を開き始めた秋は。
涙を流しながらポツポツと話し始めた。

「僕にも何でだかわからない。
だけどあつたんだ。あなたの名前が書いた大きなマシンが。
赤いボタンがひとつだけある大きいマシン。
それに。」

「それに？」

「僕にしかそのマシンは見えなかつたんだ。
他のやつにも聞いてみたけど見えないって。
俺は頷いて先を促した。

「でもよくわかつたよな。俺のこと。」
「：そういえばそうなんだけど。
僕も必死だったから。
あなたは僕の世界にはいないから。」

「え？」
今何かサラっとこいつすごいこと言わなかった？
そう思つて。

「…あなたは僕の世界には居ないんです。
もう多分あの地震で亡くなってるんです。」
「どういうことだよ。」

「…だから。あなたは这个世界にいるのはわかってるんです。
あなたの名前表札で確認したし市民コードだって確認した。
この世界はあなたがいた未来の過去でも僕がいた未来の過去でも
ない完全に パラレルワールド 平衡世界なんですよ。」
「…どういうことだ。」

「だから言ってるでしょ？
大まかな僕が知ってる出来事は起きるんだ。
今まであなたと会うまでだってどこで事故が起きて何人なくなる
かとか。」

「そんなの全部当たってきてるから。」
「火事のサイレンは鳴り止まない。」

「だったら少しぐらい！！！！」
「俺は立ち上がって。」

走り出した。

「！！！！どこへ？」
「お前の妹とか助けるんだよ！！」

「！！！！死にますよ？」
「過去が決まってるからって！！
俺が知らない過去なんだから変わろうがどうしようが知るかっ
てんだ！！」

だつて頭に來たんだ。

俺の知らない過去がどんどん決まろうとしてる。

少なくとも俺のいた世界ではこの図書館が燃えることなんかなかったし。

大地震も大津波も知らない。

俺の居た世界は平和だった。

だから俺は夢を見られた。

俳優目指して楽しかったんだ。

…こんな悲しいことばかり起こる時代に夢なんか見られないじゃないか。

現実見るしかないじゃないか！！

それなら何にも知らない俺が。

変えてやるって思ったんだ！！

知ってたら怖い現実も。

知らなかったらもしかしたら良いふうに変えられるかもしれないだ

3
2
1
?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7725w/>

その手を離さない。

2011年10月22日10時02分発行